

7... 礼に始まり礼に終わる—アントンIIヘーシク

*全四階級

一九六四年十月二十日、二十三日、東京都千代田区にある日本武道館で柔道競技が行われた。当時は、男子のみ全四階級での競技であった。(六十キログラム以下級、八十キログラム以下級、八十キログラム超級、無差別級の四階級。)

*神永昭夫

(一九三六—一九九三) 高校在学中に柔道を始める。おそい出発であったがめぐまれた体格で、短時間で格段の進歩をとげる。身長一七九センチメートル、一〇二キログラム。

*アントンIIヘーシク

(一九三四—二〇一〇) 身長一九八センチメートル、体重一二〇キログラム。神永とは、体が二回りもちがって見えた。

朝、私がテレビを付けると、どの番組でも二〇二〇年、第三十二回オリンピック大会の開催地が、東京に決まったというニュースが流れていた。—すごいな、二回目の東京オリンピックか……。

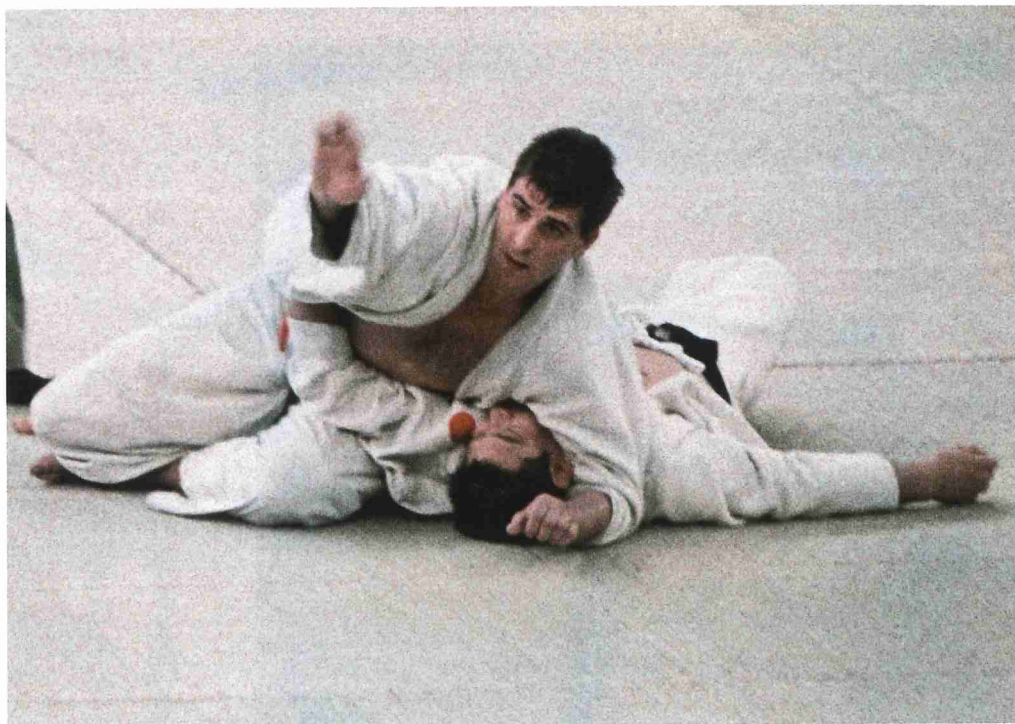
私は、一九六四年、第十八回オリンピック東京大会での、さまざまな出来事を思い出しているうちに、頭にある光景がうかんだ。それは、柔道の無差別級の試合のワンシーンだった。

当時、小学生だった私は、日本武道館で行われていた柔道に興奮していた。

日本の伝統的な武道である柔道は、このオリンピックで、初めて競技種目に加えられた。柔道では全四階級のうち、三階級で日本人が金メダルを取っていた。残る無差別級の決勝戦で、日本の神永昭夫がオランダのアントンII



● 決勝戦でのヘーシク (右) と神永 (左)



●オランダの関係者を制止するヘーシンク

ヘーシンクに勝って金メダルを取ると、日本の完全制覇せいぱとなる。

私は、その試合を父とテレビで観戦していた。おたがいが礼をして、十分間の試合が始まった。最初は神永が優勢ゆうせいだったが、開始から五分を過ぎると、ヘーシンクのはげしいせめが続いた。

「神永がんばれ。」

日本人が一つになって応援おうえんしている気がした。

しかし、ヘーシンクの力はおとろえず、ついに神永をおさえこんだ。

「一本。」

審判しんぱんの声が上がり、神永が負けた。私は信じられなかった。日本武道館は静けさに包まれた。

一方で、日本の完全制覇を止めたオランダの関係者は、大喜びだった。そして喜びのあまりいすから飛び上がり、ヘーシンクのもとへかけ寄ろうとした。

すると、ヘーシンクはまだ神永をおさえこんだまま、右手を大きく上げてそれを制止すると、近づいてきたオランダの関係者を（こっちへ来るな。）ときびしい表情

でにらんだ。

私は、(どうして。仲間が喜んでくれているのに。)と不思議に思った。

その後、ヘーシンクと神永は柔道着を正し、しっかりと向き合って礼をして、試合場を後にした。

それを見ていた父は、感激かんげきしてつぶやいた。

「そうだ、まだ試合は終わっていない。試合場が上がってはいけないんだ。ヘーシンクがいちばんうれしかったにちがいないのに。柔道は、『礼に始まり礼に終わる』。相手に敬意けいをもち、柔道の精神を表したヘーシンクは立派りっぱだな。」

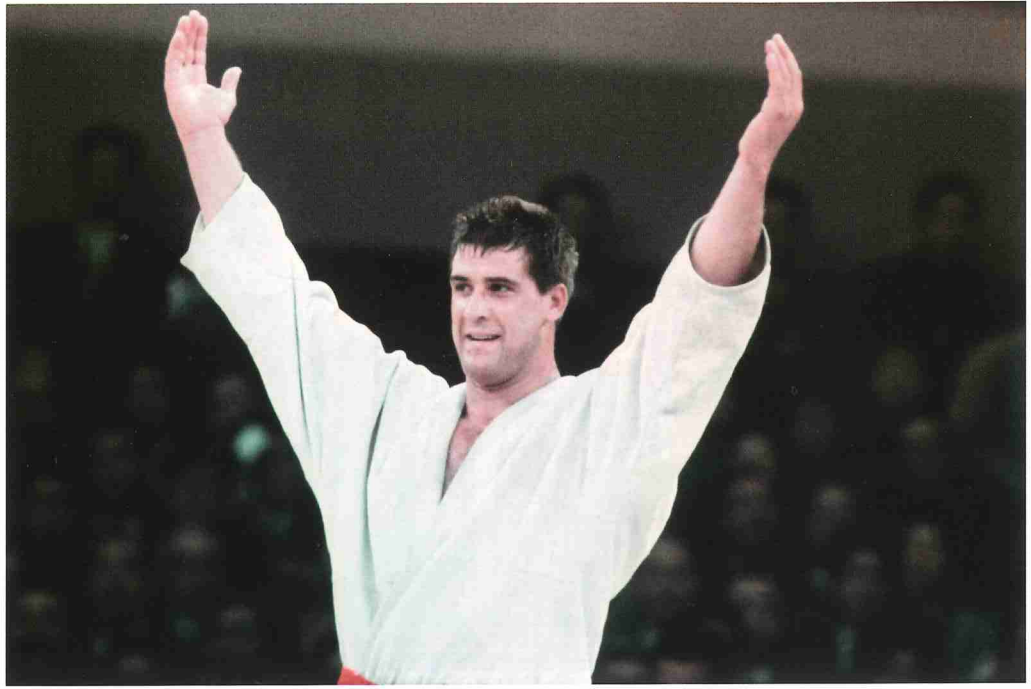
父の言葉を聞いて、私ははっとした。試合の勝敗ではなく、ヘーシンクこそ、真の勝者なのだと感じた。

このときの日本柔道選手団監督かんとくの松本安市氏まつもとやすいちは、「日本が負けたことはくやしいが、不思議なことに、ヘーシンクには腹はらが立たない。」と語っている。

大人おとなになった今でも、「東京オリンピック」という言葉を聞くと、そのときのことを思い出す。

だが、柔道は、東京オリンピックだけの実施種目で、次回の一九六八年、メキシコオリンピックでは、外されることになった。しかし、ヨーロッパを中心に、次第に人気が高まり、競技人口が増えてレベルも上がっていった。そのため、一九七二年のミュンヘンオリンピックでは、柔道は再び正式種目として復活したのである。

よく考えてみると、東京オリンピックで日本が完全制覇していたら、どうであつたらう。復活



は難しかったかもしれない。ヘーシンクが日本の完全制覇を防ぎ止めたからこそだという気もする。

ヘーシンクは、ただ勝利しただけでなく、『礼に始まり礼に終わる』という柔道の精神を具現化したとして、高く評価されているということだが、そう考えると、東京オリンピックでの柔道の試合は、とても有意義な出来事だったのだと、思われてならない。

二〇二〇年、第三十二回オリンピック東京大会では、日本の私たちが、そのようなすてきな光景を見せたいものだ。

1 父の言葉を聞いてはっとした「私」は、どんなことを考えたのでしょうか。
2 礼儀正しくできたことや、できなかったことはありますか。